

時計にらみカラー処理 ソウル五輪

■新編集講座 ウェブ版 第132号 2019/9/15

毎日新聞社 技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

1988年9月17日に開幕したソウル五輪から31年になります。そのころ、私は大阪本社整理部（現・編集制作センター）の若手編集者で、五輪班に入り、連日連夜、五輪紙面制作に走り回っていました。当時はまだ新聞のカラー印刷技術が未成熟な時代。写真を色分解し印刷用の原版を作成するのに、カラー写真と白黒の記事部分を組み合わせ紙面制作するのに、時間がかかり苦勞しました。画像処理も組み版もワンタッチでできる現在の端末機器を見ると、隔世の感があります。

■ 東西のスターが一堂に

開幕日の夕刊1面（大阪本社版）を見ましょう＝図①。日本選手団入場行進が大きく載っています。締め切りまでの短い時間、カラー写真処理に冷や汗をかいたのですが、その話の前に、見出しにご注目。「東西スーパースター 一堂に」とあります。五輪に大選手が集まるのは当たり前じゃないか、と言われそうですが……。

80年のモスクワ五輪の際は、開催国・ソ連（当時）が前年の79年にアフガニスタンに侵攻したことに抗議し、米国や日本、西独（同）、それに中国やイスラム諸国がボイコットしました＝図②。続く84年のロサンゼルス五輪（米国）の際は、米国が前年の83年にカリブ海の島国・グレナダに侵攻したのを理由に（実際は前回の報復として）、ソ連や東独（同）などの東側諸国がボイコットしました＝図③。

ソウル五輪は、76年のモントリオール五輪（カナダ）以来、12年ぶりに米ソの両超大国がそろった五輪だったのです。

■ 個人的にハングルを勉強

米ソそろい踏みほかに、個人的にもソウル五輪には思い入れがありました。

私は大学で言語学を専攻したのですが、多くの外国語を学ぶよう教授に勧められ、韓国語の講座も受講しました。○や□など図形にしか見えない文字（ハングル）をどう読むか、興味があったからです。韓国語は日本語と語順や文法が似ている上、漢語はほぼ共通なため、無事に単位を取得しました（実力が伴ったかどうかは別です）。

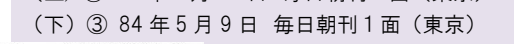
就職してからも、怪しげな会話力を頼りに何度か韓国を訪問＝写真④。五輪を前にダイナミックに変わっていく姿を見ていました。それだけに、ソウル五輪報道に関わりたと思っていたのです。



(上) ① 1988年9月17日 毎日夕刊1面（大阪）



(上) ② 80年8月25日 毎朝刊1面（東京）



(下) ③ 84年5月9日 毎朝刊1面（東京）



真珠湾攻撃と同じ昔

五輪ボイコットの起点となったソ連のアフガン侵攻(79年)から40年になります。私が入社したのは81年で、その40年前と言えば、41年の真珠湾攻撃と太平洋戦争勃発です。今年の新入社員にとってのアフガン侵攻は、私にとっての真珠湾と同じ昔なのです。



(上) ④ 韓国・부산駅前に立つ私＝85年

■ 20 年ぶりの全面大阪制作

こうして始まったソウル五輪。新聞業界に限らず、産業全般でも、オリンピックなどの大きなイベントを契機に、技術革新が進みます。ソウル報道の場合、紙面のカラー化が一気に進みました。

金メダル1号や日本選手の体操の写真を掲載した1面=図⑤。今の目で見れば、ごく普通の紙面です。でも当時は、カラー写真の電送や印刷の原版作成に多大な時間を要しました。競技予定と締め切り時間をにらみ、列車ダイヤのような工程表を作ったものです。

また東京本社作成の計画では、各本社の締め切り時間の違いから、大阪に必要な写真が間に合わないことが判明。時間を稼ぐため、メキシコ五輪(68年)以来20年ぶりに、大阪本社版の五輪紙面は全て大阪で制作することになりました(東京から大阪に完成紙面を送る時間が省けるのです)。「東京よりいい紙面を作ろう」と誓ったのを覚えています。

■ 「光の三原色」と「色の三原色」

ここでカラーの原理を説明しておく、よく使う「三原色」という言葉には、「光の三原色」と「色の三原色」の2種類があります。

「光」は、テレビやコンピューター画面など、発光で色を表現するケースです。光の色は無数にありますが、赤(Red)、緑(Green)、青(Blue)の3色を「光の三原色」と称し、頭文字から略称をRGBと呼ぶこともあります=図⑥。この3色の組み合わせで、ほぼ全ての色を作り出せるのです(全部重ねると白くなり、電源を切ると黒くなります)。

一方、印刷で用いられるのが「色の三原色」です。水色(Cyan)、赤紫色(Magenta)、黄色(Yellow)が基本色で、頭文字からCMYと呼ぶこともあります=図⑦。この3色のインキを組み合わせると、ほぼ全ての色を表現できますが、「白」は出せません。インキの乗らない部分が白(と言うより、紙の色)なのです。ポスターや雑誌で特に鮮やかな色を出したい場合など、特別のインキ(特色)を使うこともあります。

■ メニューも分からず注文

さて新聞の話に戻ると、紙面は、記事や見出しなど白黒で刷る部分と、カラー写真や図版など多色印刷する部分で構成されています。

このうちカラー部分は、写真や図版などの素材を入手すると、印刷のため「色分解」という作業を行い、C版、M版、Y版という三つの原版を作ります=図⑧~⑪(※欄参照)。ここに時間を要したのでした。

※ CMYを重ね「黒」を出すと濁った色になるため、黒版(BlackからK版と呼ぶ)を別に作りますが、説明簡略化のため、ここでは省きます。

色分解は、掲載サイズにより作業時間が違うし、ざら紙に高速で刷る新聞印刷の特性を考慮した処理も必要になります。締め切り時間の数時間前に発注する必要があり、記事分量も、五輪以外のニュースのメニューも分からない中、サイズや掲載位置を決めるのに悩みました。

そうした組み版の苦勞については、稿を改めてお話ししましょう。



(上) ⑤ 88年9月19日 毎日朝刊1面(大阪)

ハイビジョンで実験

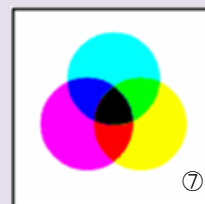
特派員の写真が間に合わない時に備え、テレビのハイビジョン映像(当時行われていた「高精細度」の試験放送)をプリントし紙面に使う実験も、NHKや富士フイルムと共同で実施しました。結果は非常に鮮明で、実用に耐えるものでした。



光の三原色

赤(Red)
緑(Green)
青(Blue)

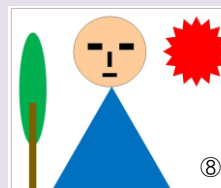
色を足せば足すほど明るくなります。



色の三原色

水色(Cyan)
赤紫色(Magenta)
黄色(Yellow)

インキを足せば足すほど暗くなります。



色分解の処理

カラー図版を入手すると、色分解処理行います。図⑧~⑪は、それを模式図にしたもので、実際の作業とは異なります。

元の図⑧は、とてもカラフルな図柄です。これを色分解し、C版(図⑨)、M版(図⑩)、Y版(図⑪)の三つを作ります。

これは極端な例にしたので、元の図の真っ赤な太陽は、M版とY版にだけ現れ、C版には登場しません(水色の成分を含んでいないのです)。

こうしてできたCMYの三つの版を刷ると、元の図版が再現され(たように見え)ます。

